

「金銭出入覚帳」の性格と内容（一）

——武州荏原郡奥沢村原家文書の事例——

森 安 彦

目 次

一 はじめに

三 奥沢村の歴史的概観

二 原家と原家文書

四 元文元年九月「万覚書帳」の検討

（未完）

一 はじめに

近世の村方文書は大別して領主権力との関係で作成される公文書と家や個人との関係で作成される私文書がある。前者には年貢・法令等名主文書の大半はこれで占められる。後者には、家を中心とした相続や冠婚葬祭、経営、金銭出入帳（出納帳）、日記、書状等多様なものが存在している。

公文書では、村の組織や支配の骨格・輪郭を説明する上で欠くことのできないものであり、私文書は公文書では把握できない日常世界を突き止める上で必要なものといえよう。両者相俟って村落史研究の成果があがるものと考えられる。

しかしながら、これまでどちらかといえば私文書が軽視され、歴史研究の史料としての視野に入りにくかったように思う。歴史研究が日常的な生活史を重視するようになってきた最近の動向の中では、私文書の重要性が改めて認識されてきたといえる。

ここでは、私文書の中でも、これまであまり取りあげられてこなかった「金銭出入覚帳」を対象として、なぜこのような帳簿が作成されたのか。その内容はいかなるものなのかを中心に検討してみたい。

金銭出入帳簿は、農民生活の具体的姿を説明する上でもっとも重要な文書である。すなわち、農民がどのようなものを生産し、それを売ってどの位の金銭を獲得し、その金銭で生活上必要なものを購入したり、年貢の上納に充てたり、さまざまな興味ある事柄が判明するのである。近世農民の日々の生活実態の解明に役立つ基本史料といえよう。小稿では、武州荏原郡奥沢村原家文書に存在している「金銭出入覚帳」を検討対象とした。とくに最近刊行された『世田谷区史料叢書』第一巻（東京都世田谷区教育委員会、一九九六年三月刊行）には、次の五冊が収録された。名称こそさまざまであるが、総括的名称でいえば、「金銭出入覚帳」ということができよう。

これら五冊の文書の名称と対象とした年代等は次の通りである。

一、元文元年九月「万覚書帳」は、その名のとおり、さまざまな記録をその内容としているが、中心記事は、金銭の出納である。記載時期は元文元年（一七三六）から寛延三年（一七五〇）までの一五年間と宝暦・明和期（一七五一～七二）の数年分も含まれている。

二、元文元年九月「御年貢上納万帳」は、元文元年（一七三六）から寛政四年（一七九二）までの五六年間における毎年の年貢納入の状況を克明に記録したものであり、農民の年貢負担の実態が解明できる貴重な史料である。

三、元文二年六月「茄子覚帳」は、江戸周辺農村として大量の前栽物を生産し出荷している状況が判明するもので

ある。その内容記載は、元文二年から明和九年（一七三二）の三五年間に及ぶものであり、茄子のほかに干大根、大角豆、白瓜、いも、柿等が出荷され、農家経営を支えていた実態が浮き彫りとなるのである。

四、宝暦三年（一七五三）「金銭出入覚帳」は宝暦三年から同一〇年（一七六〇）までの七年間の記載を含み、五冊目の宝暦十一年「金銭出入覚帳」に接続している。

五、宝暦十一年「金銭出入覚帳」は宝暦十一年から明和三年（一七六六）までの六年間の記録である。

これらの「金銭出入覚帳」（総括的名称）が元文元年から開始されている意味は何であろうか。

それらの検討に入る前に、原家と原家文書、奥沢村の歴史的概観等について述べておきたい。

二、原家と原家文書

原家は奥沢村の年寄役で、文書で判明する元文期（一七三六―四〇）以降は新左衛門を称し、明治期（一八六八―一九二一）には市五郎、伊八、大正期（一九二一―二五）には菊次郎と名乗っている。

原家文書は現在世田谷区立郷土資料館に寄託され、原家文書目録が、同館編集『世田谷諸家文書目録』に収録されている。⁽¹⁾

それらの文書の記載によると、原家の持高は一一石六斗二合二勺で、延享三年（一七四六）十二月十七日には次郎兵衛二石四斗一升一合を分家し、原家の持高は九石一斗九升一合二勺となった。⁽²⁾ 分家の次郎兵衛家は、寛政六年（一七九四）「商売家数等書上」によると、「間口五間半 青海苔かつき商仕候、天明元年より商売致来申候」とある。⁽³⁾ 原家は持高九石余所持の上層農民であり、分家の次郎兵衛家は二石四斗余で農間余業によって生計を補充していたものと

いえる。

次に原家文書の概要について簡単に述べ、「金銭出入覚帳」の占める意味を考えてみよう。

原家文書は、総点数二二二点で最古のものは元文元年（一七三六）、最新のものは大正八年（一九一九）である。その文書内容は大別して、支配関係文書と私文書があり、前者には年貢関係・助郷関係・村況関係、後者には金銭出入関係・冠婚葬祭・教育関係等がみられる。それらの主要のものを掲示すると次のとおりである。

支配関係文書の年貢に関しては、年貢皆済状が元文元年から慶応二年（一八六六）までの間に七〇点（但しこれは、名主が村民に発行したもの）、諸税領収書が明治一〇年（一八七七）から大正八年（一九一九）までの間に四五点ある。助郷関係では、明和二年（一七六五）「品河役組高割合帳」、同三年・同四年「品川人馬割取帳」、天明二年（一七八二）「品川助人馬組合改め覚帳」、文化三年（一八〇六）「御用人足・品川人足出勤高覚帳」、同一二年（一八一五）「品川人足ほか勤高覚帳」がある。村況関係では、安永九年（一七八〇）「武蔵国荏原郡世田ヶ谷領奥沢村鏡様子大概書」、天明四年（一七八四）・同五年「五人組宗門人別改メ下書」、寛政二年（一七九〇）「安永八亥年当戌年人別増減書上」、寛政六年（一七九四）「商売家書上帳」、同年「農間渡世書上帳」がみられる。

私文書関係では、金銭出入関係として、元文元年「万覚書帳内手扣」、同年「御年貢上納万帳」、同二年「茄子等出荷覚帳」、宝暦三年（一七五三）・同五年・同一一年・文化三年（一八〇六）の「金銭出入覚帳」、安永元年（一七七六）・天明六年（一七八六）の「万覚帳」・文化三年（一八〇六）の「金銭出入覚帳」がある。冠婚葬祭に関するものとしては、安永五年（一七七六）「窓幌妙印埋葬につき後日之覚」、嘉永四年（一八五二）・安政二年（一八五五）の「御祝儀覚帳」、明治一二年（一八七九）「香奠帳」、同二七年（一八九四）「先祖式百年忌香奠帳」が存在している。教育関係としては、寛政四年（一七九二）「新童子往来万世宝鑑」、明治四〇年（一九〇六）「小学校生徒授業料督促状」があ

る。勿論このほかにも種々あるが、ここでは省略する。

次に奥沢村の歴史的概観について述べてみよう。

三 奥沢村の歴史的概要

(一) 原始・古代・中世の「奥沢」

「奥沢」は「おくさわ」「おくざわ」ともいう。地名の由来は、荏原郡内にある七沢の一つに奥沢があったことによるとい⁽⁴⁾。

「奥沢」の原始・古代・中世に関しては、ほとんど未詳であるが、原始・古代に関しては、縄文中期の土器・石斧・石鏃や堅穴住居址群が発見されている。また古墳も多摩川古墳群の一つである「あたご塚」が奥沢本村にある。⁽⁵⁾ 中世については、貞和年間（一三四五―四六）頃より吉良治家の所領となり、天正一八年（一五九〇）の吉良氏朝の没落まで続いたとい⁽⁶⁾。浄真寺の境内はもと吉良氏の畧跡であつたとも、吉良氏の家臣大平出羽守の居住地であつたともい⁽⁷⁾。

(二) 近世「奥沢」の支配形態

天正一八年（一五九〇）の後北条氏の滅亡と共に吉良氏の所領も消滅し、徳川家康の関東入国により「奥沢」は徳川氏の直轄領に編入され、武州荏原郡世田谷領奥沢村と称した。

天正一九年（一五九二）家康は直参渡辺勝（孫三郎）に武州都筑・荏原両郡のうちで二二〇石の知行所を与えたが、その一部として奥沢村五五石が渡辺勝の所領となり、以後明治維新まで続いた。知行所の御朱印が下付されたのは三

代將軍家光の寛永二年（一六二五）のときであつた。⁽⁸⁾

正保期（一六四四～四七）の『武蔵田園簿』によると、奥沢村は渡辺孫三郎知行として村高五五石であり、村高の内訳は田方が四四石、畑方が一一石という小村であることが判明する。⁽⁹⁾

寛文期（一六六一～七二）は新田開発が大規模に進められた時期であるが、その例にもれず「奥沢」でも寛文二年（一六六二）に本村の西方が開墾され、寛文九年には検地を受け、奥沢新田村が成立し、幕府直轄領に編入された。元禄八年（一六九五）には織田越前守信久の検地をうけ、村高四〇七石三斗二升七合となり、本村の村高五五石に比較すると村高の規模が約八倍である。

寛延三年（一七五〇）の「御定免反取書上ヶ帳」によると、奥沢村（新田村）は村高四〇七石三斗七升七合で、田方は全然存在せず、畑方八八町四反五畝四歩である。このほか村高には編入されていない林・原・藪・芝地などが四町四反五畝歩ほどあつた。⁽¹⁰⁾

文政一〇年（一八二七）の改革組合村結成のときの村高では、奥沢本村は渡辺栄之丞知行所高五五石であり、奥沢村は幕府代官中村八太夫支配で高四〇七石三斗七升七合となっており、⁽¹¹⁾変化していない。

明治元年（一八六八）の『旧高旧領取調帳』では、奥沢本村は渡辺修理知行五五石、奥沢村四〇七石五斗八升一合となり、翌二年からは品川県に編入され、⁽¹²⁾さらに同四年から東京府の管轄となり、第七大区六小区に属した。

明治五年（一八七二）の『東京府志料』では、奥沢本村の反別として田が三町七反九畝二九歩、畑が五町三反七畝二五歩とあり、これが村高五五石の反別の内容であることがわかる。奥沢村の反別は畑が八八町八反三畝二〇歩とあり、⁽¹³⁾上記の寛延三年（一七五〇）の頃とほとんど変化していないことがわかる。

(三) 近世「奥沢」の村落動向

① 家数・人口の動態

近世の「奥沢」は、中世以来の奥沢村と寛文二年（一六六二）に開発された奥沢新田村の二村から成り立っているが、近世中期以降は、前者は奥沢本村とよばれ、後者が奥沢村とよばれている。

〔第1表〕家数・人口の動態

本村・新田 内容	奥沢村（本村）		奥沢新田村（奥沢村）		合 計		出 典
	家数	人口（男・女）	家数	人口（男・女）	馬	家数	人口（男・女）
安永8年（1779）			102	445			【区史料】第4集
安永9年（1780）			96	447	24		〃
天明4年（1784）			102				〃
寛政2年（1790）			102	448	20		〃
寛政6年（1794）			105				〃
化政期（1804～29）	21		106			127	【風土記稿】
天保14年（1843）	26		106			132	【区史料】第3集
明治5年（1872）	26	145（69・76）	113	666（343・323）	9	139	【東京府志科】
大正3年（1914）						162	【玉川沿革誌】
大正9年（1920）						344	〃
昭和5年（1930）						1134	〃

（注）昭和5年の家数の数字は世帯数である。

さて、奥沢本村・奥沢村の家数・人口の動態はどのようなものであったろうか。現在判明する限りの史料⁽¹⁴⁾によって表示すると、第1表のとおりである。すなわち、近世前期の家数・人口は、まったく不明で、中期以降が断片的に知られるのみである。⁽¹⁵⁾

奥沢本村の高五五石の家数は化政期（一八〇四―二九）に二一軒、天保一四年（一八四三）と明治五年（一八七二）ではいずれも二六軒である。人口は明治五年一四五人で男は六九人、女は七六人で、一軒当り平均家族数は五・五人である。

いっぽう、奥沢村の高四〇七石余の家数・人口は安永八年（二七七九）に一〇二軒・四四五人で一軒当りの平均家族数は四・三人となる。天保一四年（一八四三）までは一〇六軒程度で家数も人口も、ほとんど変化していないといえる。明治五年（一八七二）には家数一二三軒・人口六六六人となり、一軒当りは五・八人となり本村の五・五人よりやや多くなっている。

合計欄は奥沢本村と奥沢村を合わせたものであるが、大正三年（一九一四）より同九年（一九二〇）のわずか六年間で家数は二倍にふえ、人口も著しく増加し、さらに昭和五年（一九三〇）にかけて急増している状況が判明する。

以上により、近世中後期の家数・人口は停滞的であり、天保期以降幕末維新期にかけてやや増加傾向を示し、大正一〇年前後から同一二年（一九二三）の関東大震災以降急激に増加したといえる。

② 農民生活の動向

奥沢村の農民生活の状況を示すもつとも古い史料は安永九年（二七八〇）の「奥沢村鏡様子大概書」である。⁽¹⁶⁾それによると、奥沢村は、①主要道路からはずれ賑いの場所でなく、商売のできないところである。②土地柄が悪く、大量の肥料を投入しなければ収穫をあげることができない。③食料不足のため村を出て奉公稼に行かねばならず、村に

残った者も春になれば摘草をして生計をたてている有様である。④江戸への道法は三里余り（二二キロメートル）という遠方で生活の助けにはならない。⑤皆畑で田がないので藁は他所から購入しなければならない。⑥他所と比較しても、特に近年は困窮が激しい村であると強調している。多少誇張があるとしても疲弊した村といえよう。では実際はどんな状態であつたのだろうか。

ここでは、寛政六年（一九九四）「商売家数書上」⁽¹⁷⁾と天保一四年（一八四三）「組合内村々商家取調書上帳」⁽¹⁸⁾の農間余業の存在形態を検討することによって農民生活の一端にふれてみよう。前者は寛政改革、後者は天保改革の際に作成された史料である。

寛政六年の場合を表示すると第2表のとおりである。ここから判明することを簡単に箇条書してみると、①商人一人、職人二人、商人兼職人は二名であり、総家数一〇五軒のうち二四軒、すなわち二〇％が非農業生産を主体とする商人・職人である。②商人は食料・嗜好品・調味料・雑貨品等を商う零細経営であり、質屋・酒造・肥料商兼穀商等の豪農的経営ではない。また間口七間半から四間半までの店を構えているが、その多くは、かつぎ商いの行商である。③営業開始時期は比較的早く元禄期（一六八八―一七〇三）からの者が三人おり、とくに仁兵衛と万蔵は「毎年四月三日と十二日迄、同村浄真寺千部中蕎麦を商来申候」とあり、浄真寺門前で千部会の期間参詣人相手に蕎麦店を出していたことがわかる。天明元年（一七八二）には四人が、集中的に店を出していることが注目される。④職人は大工三人、草屋根屋（葺）三人、杣六人、磨彫一人である。寛政六年から四一年後の天保一四年の状況を表示すると第3表のとおりである。①奥沢村の商人は八人で、その内四人は寛政六年と同一人物である。商人の商種の内容はほとんど変化していない。八人の他に、新たに質屋・鍛冶屋・仏師が各一人ずつ出現している。②寛政六年にみられた大工・草屋根屋・杣などの職人の記載がみられないが、実際には存在していたのだろう。③奥沢本村の農間商人と

〔第2表〕 寛政6年 奥沢村農間商人・職人一覧表

商・職人 名前	食料			嗜好品			調味料			雑貨			材			職人		店の 間の 口	営業開 始時期	備考	
	豆 腐	蕎 麦	穀 物	青 海 苔	煙 草	菓 子	鮎 油	醬 油	紙 油	線 香	抹 香	草 履	草 鞋	木 工	大 工	草 屋 根 屋	杣 影				
仁兵衛	○	○								○	○	○			○			6間半	元禄年中		
万蔵		○							○	○	○							7間	元禄年中	かつき商	
紋兵衛						○													元文中		
長兵衛			○			○						○						7間半	宝暦年中		
清右衛門														○				4間半	明和年中	かつき商	
平治郎				○		○		○		○	○							4間半	天明1年		
伊之助								○										5間半	天明1年	かつき商	
治郎兵衛				○														5間半	天明1年	かつき商	
長助						○												5間半	天明1年	かつき商	
奎右衛門							○		○	○	○	○	○					6間半	天明1年	かつき商	
佐五左衛門														○							
三左衛門														○							
庄右衛門															○						
伝右衛門																○					
友右衛門																	○				
三右衛門																					
新平																			○		
治兵衛																			○		
金兵衛																			○		
忠右衛門																			○		
三之助																			○		
権助																				○	
合計	1	2	1	1	2	1	3	2	3	3	2	3	4	4	2	1	2	3	3	6	1

(注) 『世田谷区史料』 第4集 178～179頁より作成。

〔第3表〕 天保14年 奥沢村・本村の農間商人・職人一覧表

村名	商・職人 名前	食料		嗜好		品		調味		雑		貨		その他		備考						
		豆	穀物	鮭荷	煙酒	鉛	甘酒	菓子	餅団子	醬油	酢	油	紙類	蠟燭	草履		草鞋	線香	質屋	鍛冶屋	仏師	
奥沢村	仁兵衛	○	○		○					○	○	○	○	○		○	○				寛政6年有り	
	長兵衛	○	○				○			○	○	○	○	○	○						寛政6年有り	
	五郎兵衛		○		○					○	○	○	○	○	○							
	善五郎					○		○														
	万蔵					○		○													寛政6年有り	
	市右衛門				○				○	○	○		○	○	○							
	四郎兵衛							○														
	長助			○																	寛政6年有り	
	佐次兵衛																	○				
	伊之助																		○		寛政6年有り	
本村	五右衛門																			○		
	六兵衛						○															
合	計	2	3	1	2	4	2	1	3	1	5	5	4	4	4	4	4	2	1	1	1	

〔注〕『世田谷区史料』第3集 294頁より作成。

して六兵衛と万次郎が記載されているが、その内容は奥沢村の商人らとほぼ同じである。

以上の農間商人の存在形態からみて、安永九年の「村鏡様子大概書」では、商売が成立しない村であると強調していたが、必ずしもそうでないことが指摘できるが、もちろん零細な商いであり、過大評価することはできない。

〔第4表〕明治5年 物産書上

村 名	奥 沢 本 村		奥 沢 村	
種 類	産 額	価 金	産 額	価 金
米	27石556	102円06	早稲米 150石000	513円33
大 麦	120石000	300円00	900石000	1,125円00
大 豆	28石600	95円33	90石000	300円00
小 豆	33石000	110円00	21石000	116円62
粟	35石000	58円33	165石000	235円71
黍	16石000	26円67	7 石500	9円37
稗	33石000	58円50	137石000	137円00
蕎 麦	7 石500	35円00	35石000	38円89
干 菜 菰	200駄	50円00	250駄	56円00
茄 子	100駄	50円00	225駄	20円00
芋	30駄	15円00	150駄	75円00
甜 瓜	150駄	50円00	360駄	360円00
筍	50駄	50円00	150駄	150円00
柿 子	20駄	20円00	18駄	11円00
栗 子	10石000	15円00	2 駄	8 円00
竹	10駄	7 円00	25駄	18円00
杉 丸 木	5 駄	3 円00	10駄	6 円00
薪	50駄	15円00	250駄	75円00
胡 麻	—	—	2 石500	25円00
番 南 瓜	—	—	120駄	30円00
甘 藷	—	—	15駄	12円00
合 計		1,060円89		3,321円92

(出典)『東京府志料』4、12～15頁

(四) 明治初年の「物産書上」

最後に、明治五年（一八七二）の奥沢本村と奥沢村の「物産書上」を表示すると第4表のとおりである。

これによると主穀・雑穀・前栽物・果物類で、目立つような商品作物は見当たらないが、わずかに甜瓜（まくわうり）が奥沢村では三六〇駄（価金三六〇円）と注目される。この明治初年の状況はほとんど近世後期の状況とほぼ同一とみることができよう。

四 元文元年九月「万覚書帳」の分析

ここでは、元文元年（一七三六）九月「万覚書帳」をとりあげて分析し、この種の文書からどのような実態が判明するかを一事例として述べてみたい。

この元文元年九月「万覚書帳」は、元文元年から寛延三年（一七五〇）までの一五年間と宝暦八年（一七五八）・同一四年（一七六四）、それに明和二年（一七六五）から同四年（一七六七）の三年間分と、実質的には二〇年間分の記録が収載されているのである。

記載内容は大別して支出に関するものと収入に関係するものがあり、前者では年貢・小作、生産関係、生活品、家普請、信仰・講、文化・教育、祝義等であり、後者では農産物の売却に関するものである。

この「万覚書帳」の表紙の端書に「元文元年辰六月十八日古文金御吹出」とあり、本文の冒頭には「是ハ古金壹分或ハ壹貫百或ハ壹貫百五十文又ハ壹貫三百又ハ壹貫三百五十且致□二付古金壹分ハ壹貫二百二五二相極候」とある。これは幕府が元文元年五月に金銀の改鑄を行い（元文金銀）、またこれに伴う新古金銀出入は不受理とした。すな

わち、元文小判・一分金・丁銀の鑄造であり、いわゆる元禄の悪鑄を再開したものである。これによって、それ以前の良質の貨幣と銭との交換比率を相互にとりきめて取引しなければならなかった。「金銭出入覚帳」等という性格の文書の出現には、この貨幣改鑄が契機になっていたとも考えられる。

文中の年貢・小作料の精算のたびに「古金壹両ハ四貫八百文互ニ差引相極候」等の記載がみられる。

さて支出関係の主要なものをあげてみると次のとおりである。

①年貢・小作関係では^(元文元年一月)「辰霜月廿一日、一年貢壹貫五十文 長右衛門殿も受取 内式百引小作年貢」「極月七日名主殿へ相済」とあり、原家は年寄(組頭)であるので、自分の組の百姓の年貢を徴収して、名主に納入している。

②生産関係では、江戸町方の掃除代金に関するものが少なくない。「辰七月互ニ直段相極候 一、四貫文 伊勢屋掃除代 但し七月式貫極月式貫文定」とあり、元文元年七月に伊勢屋の下肥購入代として年間四貫文で、七月と十二月に二貫文ずつ支払うことを取りきめているのである。下掃除は「南部家中喜左衛門殿」とあるように大名屋敷にも進出していた。このほか^(元文二年一月)「霜月五日 一、四百六拾文 金ニ而是ハさし渡し壹尺一寸石うす 切合共二重ハ上三寸三分下三寸竹ニ而くじらニ而日本橋かし桑名屋清左衛門ニ而」とあるが、同月八日には浄真寺より「立うす」を二〇〇文で購入すると、「同日石うす御返進申候」とあり返却している。このほか農具代・馬代の記事もある。^(元文三年二月)

③生活品関係では衣類関係の購入記事が少なくない。「午ノ極月廿九日 一、貳百文 浅黄老文貳尺」、酒・多葉粉・塩・薬代・醬油樽等がみられる。髪結代は七月と十二月に五〇文ずつ支払っている。

④信仰や講関係の記事も種々知ることができる。元文二年正月一五日には「^(通)百万辺へ」三二文を浄真寺へ出錢。元文元年十一月一日には、「家作地まつりニ西明寺様御出被成候、」とあり家作に際して地祭りを行っていたことが判明する。元文二年一〇月六日には「十夜講」として、「百文米壹升 浄真寺さまへ出ス」とある。寛保元年(一七四一)

十一月十九日には「御いせ龍太夫殿」へ一〇〇文、同年十一月には「かしま立原作太夫殿」へ三三二文を提供している。

⑤文化的記事もみられる。元文三年七月一六日には「一庭訓古本六拾文ニ而求」とあり、書籍を購入していることが注目される。元文四年三月四日には村内の手習いに関して次のような記載がみられる。

「一未三月四日手習始

如水殿居宅ト

平兵衛殿居宅ト

取替ニ成

打金三百文

戸ノ代貳百三拾貳文

源次郎	辰之介	勝之介	金次郎	喜助	市之丞	孫太郎
-----	-----	-----	-----	----	-----	-----

合五百三拾貳文平兵衛殿渡シ相済ム

師匠殿扶持方壱人前麦米稗ニ而貳升宛一ヶ月ニ壹斗四升極也、

扱又以後ハ麦稗両秋^{麦壹斗}
^(軒)稗壹斗

一間ニ而貳斗宛出シ、是ヲ年中ノ扶持方ニ定以後年々右之通両秋可出ス旨合点者則連判相済ム」

これは、奥沢新田村（後に奥沢村）で手習塾が開始されたときの記録である。これによると如水（医者）が手習塾を開業するに当って場所が狭いので如水の居宅と平兵衛の居宅とを交換することとなり、その差額として如水が平兵衛に五三二文を支払った。また筆子は源次郎をはじめ七名がおり、如水への扶持として、筆子一名につき麦・稗が二升

〔第5表〕元文2年～寛保2年 農作物売却一覧（元文元年九月「万覚書帳」より）

年 月 日	作 物	数 量	代 金	販 売 先	備 考
元文2.6.28 ◇2.閏11.5	小麦 蕎麦	8斗4升 9斗5升5合	文金2分、212文 文金1分、507文	六軒茶屋久右衛門 四ツ屋泉屋市左衛門	
元文3.10.26 ◇3.10.18 ◇3.12.29	◇ おく小豆 蕎麦	9斗5升 9升6合 1斗	950文 400文 211文	六軒茶屋久右衛門 六軒茶屋久右衛門	
元文4.1.19 ◇4.1.20 ◇4.2.3 ◇4.2.7 ◇4.7.24 ◇4.8.12 ◇4.8.日毎 ◇4.9.12 ◇4.10.13 ◇4.11.18	いも ◇ 刈大豆種 いも 茄子 葉大豆 柿 いも 蕎麦 ◇	片荷 ◇ 3斗 二ざる ざる一荷 82把 8束30 片荷 3斗3升 4斗6升	456文 416文 金2分、124文 312文 100文 金1両 300文 272文 金1分、22文 金1分、270文	高輪善六 ◇ 鶴木権左衛門 高輪善六 十郎左衛門 瀧前九兵衛 高輪善六 六軒茶屋久右衛門 ◇	代金は9月5日受取る 両ニ1石2斗8升かへ 1石3斗2升かへ
元文5.2.日毎 ◇5.6.11 ◇5.7.6 ◇5.9.23 ◇5.10.19 ◇5.11.8	いも 小麦 蕎麦 小豆 蕎麦 葉大豆	1駄片荷 3斗 5升6合 2斗9升5合 5斗7升5合 96把	1000文 966文 128文 980文 金1分、680文 金2分、500文	高輪善六 台町升屋 江戸 六間茶屋久右衛門 ◇ 衾十郎左衛門	100文3升1合かへ 100文ニ4升3合かへ 100文ニ3升かへ 両替3貫200程 1石2斗8升かへ 両ニ90把
寛保1.8.23 ◇1.8.23 ◇1.8.23	葉大豆 胡摩 柿	122把 7升3合 1束20	金1両、172文 556文 54文	衾十郎左衛門 油屋三四郎 六間茶屋久右衛門	両ニ84把かへ 両ニ1升3合かへ
寛保2.1.4 ◇2.2.22 ◇2.7.10	蕎麦 刈大豆種 茄子	1斗9升 4斗5升 ざる1荷	472文 1貫323文 90文	六間茶屋久右衛門 鶴木山屋権左衛門	100文ニ4升かへ 1分ニ3斗4升かへ

〔第6表〕 年毎の農作物売却金銭高

年 代	金	銭
元文2年	3分	719文
〃 3年		1貫561文
〃 4年	2両	2貫272文
〃 5年	1両1分	4貫182文
寛保1年	1両	782文
〃 2年		1貫885文
合計	5両	11貫401文

とし、一か月一斗四升ときめている。これ以後は、一年間で筆子一名につき麦・稗等で二斗ずつ納めるという約束をとりきめている。一八世紀の前半にすでに手習塾が成立していたことが注目される。

⑥ 社会関係として村人相互に関するものとしては、家普請や屋根の葺き替えに関する記事も少なくない。毎月一日には普請講として一〇〇文の積み立金と「ふき草八萱五尺八把式束送候」としている。

元文六年（寛保元年、一七四一年）三月、「一、七文酒代 市左衛門殿孫へ祝、又是方祝義事ノ始」とある。子どもの祝い事の開始がこの時期から始まったとい記録は貴重なものであるといえよう。

さて、次に収入関係の主要なものをあげると、その多くが農産物の売却によるものである。

元文元年九月「万覚書帳」より、農作物売却の記事を一覧表にまとめると、第5表のとおりである。

これによると、売却作物は、小麦・蕎麦・小豆・いも・刈大豆種・茄子・葉大豆・柿・胡摩の九種類である。売却

先は江戸の商人と思われるが、現段階では確認していない。各年の売却高は第6表のとおりで、元文四年（一七三九）が金二両と銭二貫二七二文、同五年が金一両一分と銭四貫一八二文でピークを示している。畑作農村における農民経営の現金収入を具体的に明示している。

これらの「金銭出入覚帳」を分析することによって農民経営や農民の生活像を具体的に把握することができるといえる。

注

- (1) 世田谷区教育委員会発行、昭和五九年
- (2) 元文元年九月「御年貢上納万帳」の表紙裏の記載
- (3) 『世田谷区史料』第四集一七九頁（東京都世田谷区、昭和三六年）
- (4) 『新編武蔵風土記稿』第二卷三七四頁（雄山閣、昭和三三年。以下「風土記稿」とする。）、『世田谷区史料』第一集三六四～三六五頁（世田谷区、昭和三三年。以下「区史料」とする。）」
- (5) 『郷土史おくさわ』八頁（奥沢神社発行、昭和五七年）
- (6) 前掲『風土記稿』第二卷三七四頁
- (7) 前掲『風土記稿』第二卷三七六頁、「世田谷の中世城塞」六〇～六七頁（世田谷区教育委員会、昭和五四年）
- (8) 『新訂寛政重修諸家譜』第八、一三五～一三七頁（統群書類従完成会、昭和四〇年）
- (9) 『武蔵田園簿』二二一～二二三頁（近藤出版社、昭和五二年）
- (10) 『区史料』第四集一八一～一八二頁（世田谷区、昭和三六年）
- (11) 『区史料』第三集二七二頁（世田谷区、昭和三五年）
- (12) 『旧高旧領取調帳 関東編』五八～六〇頁（近藤出版社、昭和四四年）
- (13) 『東京府志料』四、一二～一四頁（東京都、昭和三六年）
- (14) 『区史料』第四集所収の「原家文書」「増田家文書」が中

心であり、『区史料』第三集所収の「田中家文書」（上野毛村）にも関係史料が若干存在している。

- (15) 前掲『風土記稿』第二卷三七四～三七五頁
- (16) 『区史料』第四集一六九～一七一頁
- (17) 『区史料』第四集一七八～一八〇頁
- (18) 『区史料』第三集二九四頁

〔追記〕

小稿は「世田谷区史料叢書」第一一卷（東京都世田谷区教育委員、一九九六年三月発行）に収録した「金銭出入覚帳」の解説論文を若干改稿したものである。本叢書の編集・刊行を担当された世田谷区立郷土資料館、とくに区専門委員池上博之氏には種々お世話になった。記して感謝の意を表するものである。

なお、拙稿は〈近世史料論1〉「御用留」の性格と内容」（『史料館研究紀要』19号、21～27号）に続くものとして〈近世史料論2〉とした。

